

6 キャリア・パスポートの作成・活用

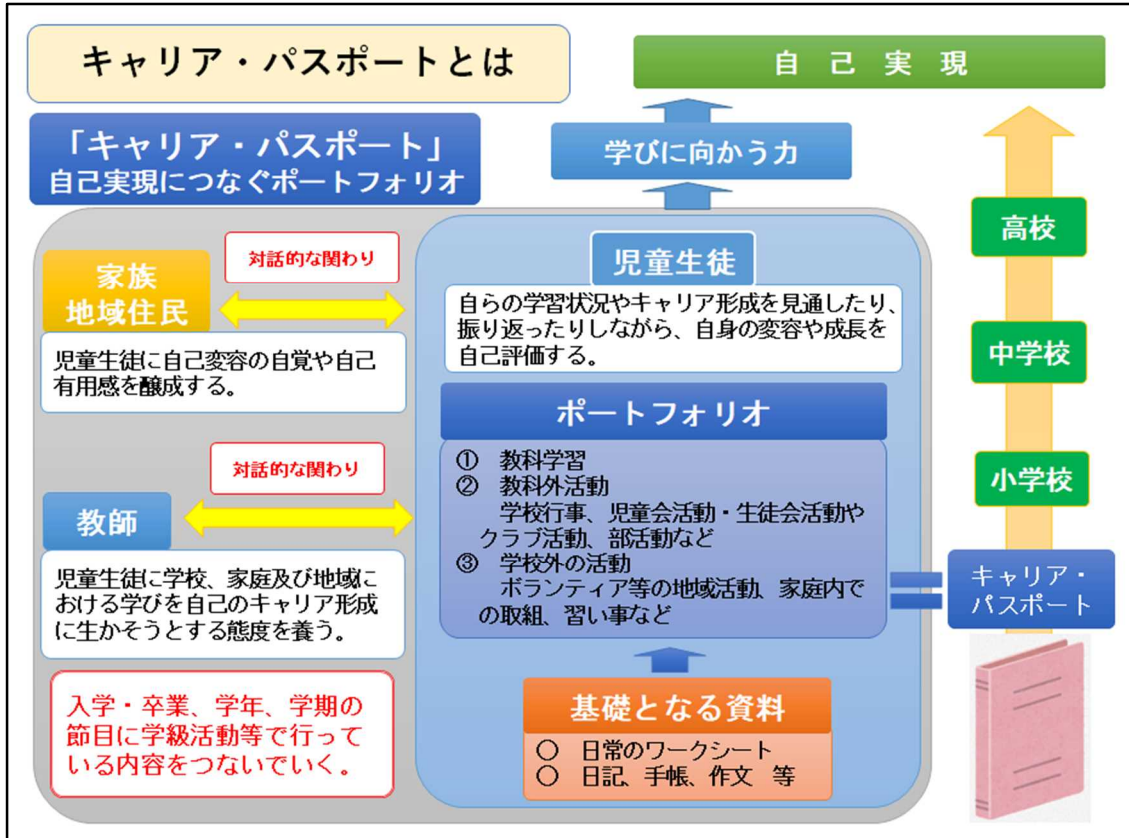
(1) 目的

児童生徒にとっては、小学校から高等学校を通じて、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりして自己評価を行うとともに、主体的に学びに向かう力をはぐくみ、自己実現につなぐものです。

教師にとっては、その記述を元に対話的に関わることによって、児童生徒の成長を促し、系統的な指導に資するものです。

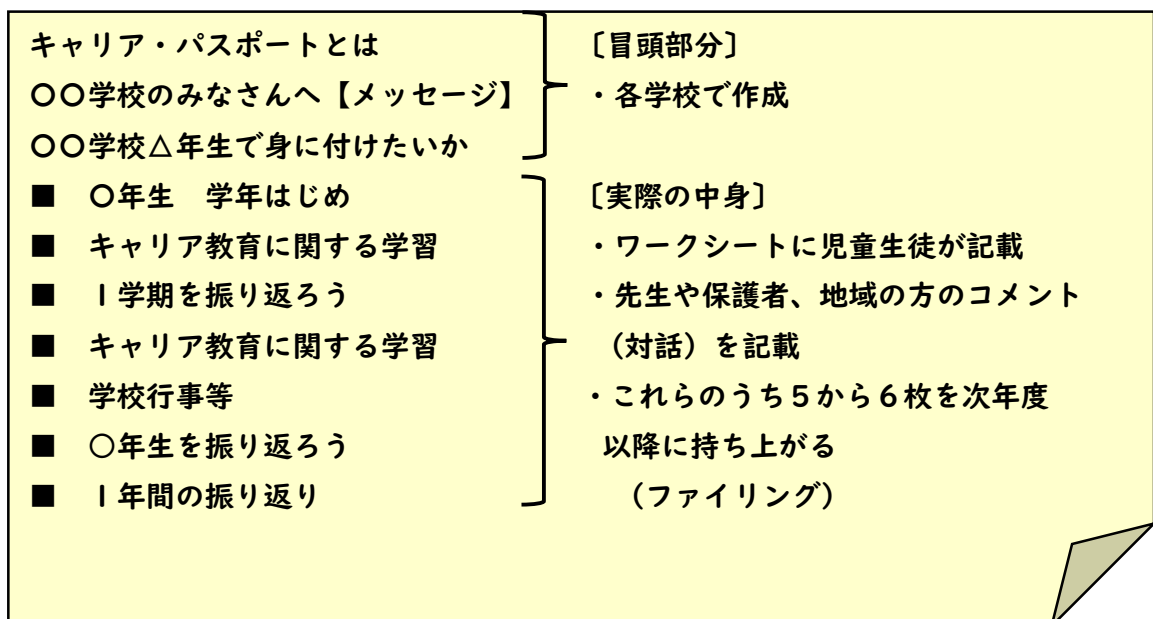
(2) 定義

児童生徒は、特別活動の学級活動及びホームルーム活動を要として、各教科等と往還しながらキャリア教育に関わる諸活動に取り組んでいます。キャリア・パスポートは、そうした活動における自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら、自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオのことです。



【キャリア・パスポートの活用に向けたイメージ図】

(3) キャリア・パスポートのつくり



(4) カスタマイズの方法

○ どのような内容を盛り込んでいくかを改めて考えます。

- ・体験的な学習活動の鍵は、事前指導と事後指導です。
事前指導・・・何のために体験をするのか。→どんな力を身に付けるのか。
事後指導・・・目標とした力は身に付いたか。→次の目標をどうするのか。
- ・児童生徒の振り返りの視点となる「身に付けさせたい力」は、学校の教育目標やキャリア教育の全体計画に基づいて設定します。
- ・市町村や地域ごとに連携先の学校と、一貫性をもってキャリア教育に取り組む場合もあります。
- ・教師や保護者、地域の方からのコメントの場面や量を工夫します。
- ・複数の学級がある学年は、学年会等での行事をキャリア・パスポートとして残していくかを話し合います。

○ 学校のキャリア教育の目標設定を改めて考えます。

- ・当該学習活動において児童生徒に身に付けさせたい力は何なのかを考えます。
- ・キャリア教育のアンケートを実施し、アンケート結果と基礎的・汎用的能力との対応関係から課題を把握します。
- ・把握した課題が解決した事を想定した「目指す児童生徒の姿」を考え、授業の場面と関連させて考えるとより具体的で分かりやすくなります。
- ・「目指す児童生徒の姿」が発達の段階に適しているかどうかを確認します。

(5) 活用上の留意事項

- ・大人（家族や先生、地域の人）が児童生徒の言動を肯定的に捉え、対話的に関わります。
- ・個人情報を含むことが想定されるため、「キャリア・パスポート」の管理は、原則、学校で行います。
- ・学年、校種を超えて引き継ぎ指導に活用します。
- ・学年間の引き継ぎは、原則、教師間で行います。
- ・校種間の引き継ぎは、原則、児童生徒を通じて行います。
- ・高校・大学入試や就職試験での活用については、「キャリア・パスポート」は児童生徒自らが記入し、入試等での活用を前提として作られたものではなく、趣旨・目的からも合わないことから適切ではありません。ただし、児童生徒が面接を受けたり自己申告書に記入したりする際の情報の一つとして参考にすることは考えられます。

(6) その他

- ・児童生徒が「書かない、書けない」ことがあっても、無理に書かせずに、本人が気付いていない自分自身のよさなどが書けるように個別に支援をします。
- ・保護者の記入については、各種通信や参観日等で周知し、参観日の日や個人面談、児童生徒に持ち帰らせて書いてもらいます。我が子に対する指摘等ではなく、“子どものよさ”や“応援メッセージ”の記入を依頼します。
- ・中学校や高等学校等は、様々な学校から進学してきた児童生徒のキャリア・パスポートの形式が違っていてもそのまましっかりと保管してください。